大崎下島大長の数量副詞語彙にみる個人性と社会性

── 数量〈多〉と〈少〉のカテゴリーの場合 ──

岩　城　裕　之

1　はじめに

方言語彙に個人差が存在していることは、これまで盛んに指摘されてきた。その個人差は音韻、文法に比べて大きく、個人差が存在していることが語の意味を確定することを困難にし、体系化も困難となると言われてきた。(室山1976、柴田1988、野林1996など)

しかし、一地域言語の一部、または全部を捉え、そこにどの程度個人差が見られるのかということについての具体的報告は未だなされていない。本発表では瀬戸内海の一島の集落の数量副詞を取り上げ、個人差の実態を報告するものである。

なお、ここで言う個人差は純粋に個人に向かうものではない。語彙体系のゆらぎという捉え方をし、社会性の低い部分を言う。ラングレベルにおいてであるため、個人差と言わず、個人性という術語を用いる。個人性の対極には社会性という語が位置する。

2　調査の実態

調査対象地は広島県竹原市沖の大崎下島最大の集落、大長である。行政区分では豊田郡豊町大長となる。人口は3824人、戸数は1493戸である。主な産業は柑橘栽培を中心とする農業である。教示者は大長の70歳前後５歳の生え抜き（兵役は外住歴として問題としない）の男女、各５名である。数量副詞については具体物の数量の数量程度を表すもので、割合を表すものは含まないと定義する。「全部」「ほとんど」などの割合を示している語は含まない。〈適当〉を中心として〈多〉〈少〉のカテゴリーが数量副詞の下位カテゴリーである。＊1 なお、数量副詞を取り上げるのは、それが直接的に具体的事物に関わらないためである。考慮すべき要素が少なくて済むからである。

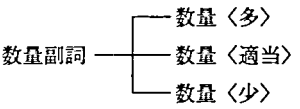
3　方法

まず、資料を得る段階では自然傍受、質問簿を用いた質問調査＊2を幅広く行う。そこで出てきたデータを元に、数量副詞を内部で分類するための分類枠を設定する。後に、この分類枠を利用して体系化を行う。それを確認するための質問簿を新たに作

成（第２次調査のための質問簿）、先に示した10名の教示者に調査を行い、体系化したもののどの部分に個人性が高くなり、どの部分に社会性が高くなっているのかを観察する。分類枠には運用の情報を含めたが、今回は運用の情報については分析していない。

4　分類枠の設定と体系化

まず、数量副詞全体は次のように分類される。



この違いは次の文によって確かめられる。

文１　＊＊ではないけれど少しならある。

文２　もう＊＊しかない。

文１によって、これを満たすものが数量〈多〉に属することが確認でき、文２によってこれを満たすものが数量〈少〉に属することを確認する。しかし、「シコタマ」などの一部の副詞は、言いかえが可能である他の語との関係において所属カテゴリーを設定する。次に、先に分類したものの下位の分類枠を設定する。具体的に得てきた文例や教示文を利用して分類枠を設定するのである。

○コー┌ヒ┐ーナラ　ナンボデモ　アリ┌マ┐スカラ。（コーヒーならいくらでもありますから。）

○エンリョ┌セ┐ズニ　┌エッ┐ト　タ┌ベナサ┐イ　┌ヨ┐。ナンボデモ　┌ア┐ルンジャケー。（遠慮しないでたくさん食べなさいよ。いくらでもあるのだから。）

○ト┌シ┐　トッテ　┌インタイシタ┐ケー　ジ┌カンワ　ナンボデモ　ア┐ル。（年をとって引退したから時間はいくらでもある。）

上の発話にみられるように「ナンボデモ」は限界性を感じさせない多量をあらわしている。気にしなくてもよい、限界はないから、といったことであろう。

しかし、その限界性を感じさせない、ということが使えない下のような場合はどうであろうか。

＊○センタクモノガ　ナンボデモ　ホシテ　アル。

目の前にあり、状態を描写しているような場合には使いにくい。

●キ┌リ┐ガ　┌ナ┐イン　ヨネー、ナンボ┌デ┐モワ。（限りがないのよね、「ナンボデモ」は。）

したがって、新たに次のような分類枠が設定できる。

★　数量の限界性を前提としない。

後の「ナンボデモ」と同じである。形態に注目すると、「ナンボ」と「イクラ」の異なりがある。ここから、方言的な響きがあるかどうかが異なる。

このようにして得られた分類枠＊3は次のようなものであった。

●数量〈多〉のカテゴリー

1　限界性を前提としない(限界がない多量)
2「エット」よりも多い量を表す
　対象・被修飾部に制限がある
3　「飲食」の意味を持つ動詞のみ修飾
4　「保有／取得」の意味を持つ動詞のみ修飾
　対象に制限がある
5　対象が気体・液体物の場合に使えない
6　対象が生物の場合に使えない
7　対象が固体物の場合に使えない
8　方言意識または共通語意識
9　品位
10　頻度
11　語の新古意識

●数量〈少〉のカテゴリー

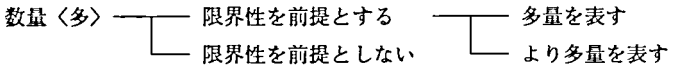
1　曖昧な数量を表す
2　「チート」よりも少ない量を表す
　対象に制限がある
3　対象が生物の場合に使えない
4　対象が固体物の場合に使えない
5　対象が液体の場合に使えない
6　対象は蜜柑のみ
7　方言意識または共通語意識
8　品位
9　頻度
10　語の新古意識

＊数量〈適当〉はその下位の分類枠は設定できない

これら分類枠相互の関係を考えた場合、数量〈多〉の場合、1と2の分類枠と3から7までの分類枠にはその性質に異なりがある。

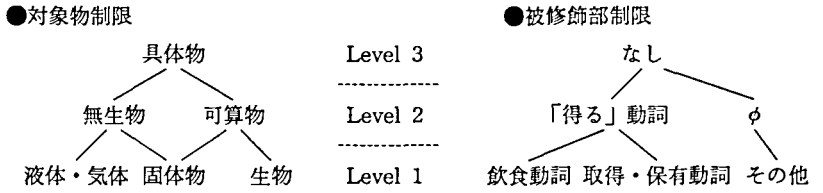
1の「限界性を前提としない」という枠に対して、「限界性を前提とする」という枠が考えられる。同様に、「『エット』＊4よりも多い量を表す」という枠に対して、「『エット』と同様の多量を表す」という枠が想定される。そして、それぞれ2つの枠は互いに相補的であり、同時に両方の枠を満たすということは考えられないし、例えば「限界性を前提とする」「限界性を前提としない」の両者はどちらが上位であるということもない。

しかし、例えば5から7までの枠では、このうち2つの枠を満たす場合も想定される。また、5から7の分類枠を全く満たさない場合には、これらの分類枠を一つでも満たす語よりも上位にあるという関係にある。5から7までの分類枠を一つでも満たすということは、対象物に制限があるということであり、全く満たさないという場合には対象物に制限はないということである。この場合、後者の方が意味の抽象度が高く、後者が上位、前者が下位の関係になる。分類枠1と2によって描かれる体系を「排他的体系（Exclusive system)」、分類枠3から7までによって描かれる体系を「包括的体系（Inclisive system)」＊5と呼ぶ。



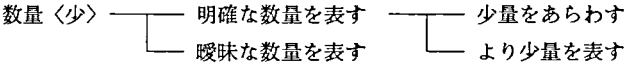
そしてそれぞれの枝に対して、対象物制限＊6、被修飾部制限という分類枠が差し向けられる。

先に樹形図で示した体系は排他的体系であり、そこに差し向けられる対象物制限、

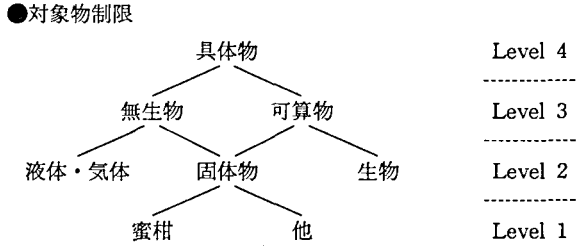


対象物・被修飾部制限は包括的体系と呼べるものである。この包括的体系のベースとなっているのは対象物と被修飾部の関係においてどういう場合に使われるか（具体性の有無）ということ＊7である。それに対し、排他的体系は数量の捉え方に関わる。

数量〈少〉のカテゴリーでは、次のようになる。



ここまでが排他的体系である。次に、包括的体系を示す。



5　個人性と社会性の出現状況

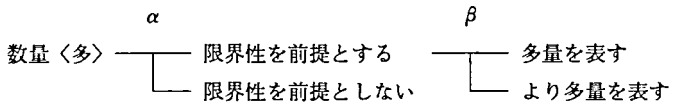
ここでは、個人性と社会性の出現状況について概観する。その際、排他的体系と包括的体系を別に扱い、それぞれについて考察する。

5.1 排他的体系の場合

5.1.1 数量〈多〉の排他的体系

数量〈多〉の排他的体系は以下のようなものであった。

ここに、それぞれの教示者の回答をもとに語をあてはめる。そして、どこが揺れ、どこが重なりを見せるのかという視点で個人性と社会性の実態を観察する。



体系図のα、βは体系の段階を示す。排他的体系では樹形図で表示されるが、それぞれの枝の分岐をα段階、β段階と呼ぶことにしたい。以下に、段階別に個人差の出現状況を観察する。

α段階

限界性を前提とする　エット 10/10　ヨーケ 7/7　ヨッケ 1/1　ヨケー 8/8　ギョーサン 7/7
ジョーサン 2/2　ヨーサン 1/1　タクサン 10/10　タラフク 9/9
イッパイ 9/9　イッパー 1/1　シコタマ 8/8　タイソー 9/9　ウント 9/9
バクダイ 10/10　タップリ 10/10　ヤマホド 10/10　ドッサリ 9/9
ドヒョーシモナー 5/5　ドヨーシモナー 1/1　フトイコト 1/1　ジョーニ 2/2

限界性を前提としない　ナンボデモ 10/10　イクラデモ 10/10

ここに囲み表示された語はない。したがって、意味上の個人差は全くないということである。この段階での揺れは観察できない。次にβ段階を見てみたい。

β段階

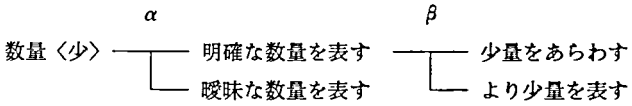
多量を表す　エット 10/10　ヨーケ 7/7　ヨッケ 1/1　ヨケー 8/8　ギョーサン 2/7
ジョーサン 1/2　ヨーサン 1/1　タクサン 10/10　タラフク 9/9　イッパイ 9/9
イッパー 1/1　シコタマ 8/8　タイソー 9/9　ウント 9/9　バクダイ 1/10
タップリ 10/10　ヤマホド 10/10　ドッサリ 9/9　フトイコト 1/1　ジョーニ 2/2

より多量を表す　バクダイ 9/10　ギョーサン 5/7　ジョーサン 1/2

ここに表示された語のうち、より多量を表すという枠に所属する語は囲み表示されたものがすべてである。これだけ「揺れがある」ということである。先のα段階での分岐では揺れが全くなかったことを考えると、これは非常に特徴的なことである。さらに、F５氏はより多量を表すという分類枠そのものを所有していなかった。

5.1.2　数量〈少〉の排他的体系

数量〈少〉の排他的体系は以下のようなものであった。



数量〈少〉の排他的体系においてもαとβの二段階を設定できる。

α段階

- 明確な数量を表す　チョット 10/10　チョート 10/10　スコシ 10/10　スコーシ 1/1　チョビット 9/9　チョボット 6/6　チビット 3/3　メクソシカ 1/1　メクソホド 9/9　ワズカ 10/10　ハナクソホド 3/3　ショーショー 10/10　チョッポシ 1/1　チョッピリ 7/7　チョンビリ 1/1　チックリ 1/1　チッピリ 1/1　ドロツキホド 10/10
- 曖昧な数量を表す　タショー 10/10

先の数量〈多〉同様、α段階では囲み表示された語がないことからわかるように、この段階では揺れがない。

β段階

- 少量を表す　チョット 10/10　チョート 10/10　スコシ 10/10　スコーシ 1/1　チビット 1/3　ワズカ 10/10　ショーショー 10/10　チョッポシ 1/1　チックリ 1/1　ドロツキホド10/10
- より少量を表す　チョッピリ 7/7　チョンビリ 1/1　チョッピリ 7/7　チョンビリ 1/1　チッピリ 1/1　チョビット 9/9　チョボット 6/6　チビット 2/3　メクソシカ 1/1　メクソホド 9/9　ハナクソホド 3/3

ここでは揺れのある語は1語「チビット」である。数量〈多〉の時と違い、揺れはあまりない。ただ、数量〈少〉では1語ではあっても、数量〈多〉も〈少〉もα段階には揺れがなく、β段階において揺れが出現するという共通点はある。

5.2　包括的体系の場合

5.2.1　数量〈多〉の包括的体系

大長における数量〈多〉の包括的体系は、4で示したとおり、「被修飾部の制限」と「対象物の制限」の2つの分類枠によって規定された。

5.2.1.1　被修飾部の制限

まず、数量〈多〉のカテゴリーで得られた語すべてについて、被修飾部に制限があ

るかどうかという観点で分類を行った。

被修飾部に制限がない　エット 10/10　ヨーケ 7/7　ヨッケ 1/1　ヨケー 8/8　ギョーサン 7/7
ジョーサン 2/2　ヨーサン 1/1　タクサン 10/10　ドッサリ 9/9
イッパイ 9/9　イッパー 1/1　タップリ 10/10　タイソー 9/9　ウント 9/9
バクダイ 10/10 ナンボデモ 10/10 イクラデモ 10/10 ヤマホド 10/10
フトイコト 1/1　ジョーニ 2/2
被修飾部に制限がある　シコタマ 8/8　タラフク 9/9

これまで同様、揺れのある語（制限があるグループとないグループに回答が割れる語）を囲み表示した。しかし、ここでは囲み表示させるべき語はなかった。すべてが明確に分類できたのである。被修飾部に制限があるか、ないかという点については個人差はない。ただ、被修飾部に何を要求するかということを見た場合に、その内実に個人差が出現する。下に、「シコタマ」「タラフク」の２語について、それぞれの語が要求する被修飾部の内容を表にした。

タラフク

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
飲食	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
取得	○			○		○					3/10

シコタマ

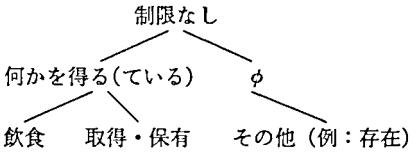
	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
飲食			○				○		NR	NR	2/8
取得	○	○		○	○	○	○	○	NR	NR	7/8

被修飾部について２語の機能分担を相補的に行っているのはＭ２、Ｍ５、Ｆ３の３氏、一方、Ｍ１とＭ４氏のように「タラフク」が「シコタマ」をカバーするパターンと、Ｍ３氏のように２語が同じであるもの、そしてＭ１、Ｍ４氏とは逆のＦ２氏のパターンの４種のパターンがみられる。両語は混同される傾向にあるのだろう。しかしながら、「タラフク」はすべての教示者が「飲食について使う」ということを回答している。同様に、Ｍ３氏のみ例外ではあるものの、「シコタマ」は「取得、保有について使う」という回答があった。何を被修飾部に要求するかという点で個人ごとに差があるものの、必ず社会的に共通する部分が存在するということである。

語はその意味に揺らがない部分を持っているということであろう。

また、Ｆ２氏は「シコタマ」を取得・保有だけでなく、飲食の場合にも使用している。表では２つの枠に○がついている。しかし、これは被修飾部が何でも良いわけではない。飲食や取得、保有以外の動詞の場合、例えば「なくなる」、あるいは「ある」

のように存在を表す動詞などの場合は不適であることを確認している。したがって、この教示者の場合、飲食（食べる、飲む、よばれるなど）や取得、保有（儲ける、貯める、貰う、手に入れる）を抽象化し、「何かを得る（ている）」という概念で「シコタマ」の被修飾部を捉えているものと考えられる。すなわち、下のように表示できる。



被修飾部の制限内容に関する個人差は、「シコタマ」と「タラフク」の混同であると見ることもできる。しかし混同するということは両者の要求する被修飾部が意味的に近い、すなわち抽象化することで一つにまとめられやすいということである。仮に片方が存在を表す動詞を被修飾部に要求する副詞で、片方が飲食の動詞を要求すれば、混同は起こりにくいのではないかと推測する。そこで上の図のように示せば、あくまでも被修飾部の制限に関しては何かを得るという意味の被修飾部で個人差はとどまっているということである。存在を表す動詞にまで拡張したり、全く制限がないというところまで拡張はしていない。いくら個人差があるとはいえ、そこには何らかの制限が生じている。

5.2.1.2 対象物制限

対象物に制限がない	エット 10/10　ヨーケ 7/7　ヨッケ 1/1　ヨケー 8/8　ギョーサン 7/7
	ジョーサン 2/2　ヨーサン 1/1　タクサン 10/10　タラフク 9/9
	イッパイ 9/9　イッパー 1/1　シコタマ 8/8　タイソー 9/9　ウント 9/9
	バクダイ 5/10　ナンボデモ 10/10　イクラデモ 10/10　フトイコト 1/1
	ジョーニ 2/2
対象物に制限がある	バクダイ 5/10　タップリ 10/10　ヤマホド 10/10　ドッサリ 9/9

被修飾部制限では制限の有無については揺れが見られなかったものの、ここでは「バクダイ」が揺れを見せる。しかし前節で見てきたような排他的体系とは違い、これは包括的体系なのである。したがって、揺れがあるということで体系そのものが揺らぐということにはならない。それを立証するためにも、次に、制限の内容を見てゆく。

先と同じように表の形で示すことにするが、処理の都合上、分類枠の書き方とは異

なった方法をとる。分類枠では「液体・気体には使えない」といった、「使えない」を中心とした分類を行ったが、ここでは「液体・気体について使える」という分析に変える。何について使えるか、とした方が表にしたときわかりやすいというのが理由である。また、後の考察も明解になると考えられる。

タップリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固 体 物			○				○		○	○	4/10
生　　物											0/10

ヤマホド

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物											0/10
固 体 物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　　物		○	○	○			○	○	○	○	7/10

ドッサリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物											0/10
固 体 物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　　物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10

バクダイ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固 体 物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　　物		○		○				○	○	○	5/10

この表で示した4語にふれる前に押さえておかなくてはならないことは、これ以外の語は全く個人差なく、対象物の制限がないという結果であったことである。このような語は表にしていない。対象物に制限がある語は「ドッサリ」「ヤマホド」「タップリ」「バクダイ」の4語、その中で、制限内容に揺れがない語は「ドッサリ」1語だけであった。対象物制限については、その制限内容に個人差が見られる。

対象物に制限のある4語のうち、「ドッサリ」以外の語には揺れが見られる。しかし、必ず100%回答が一致する枠が見られる。先にみた、被修飾部制限がある語の場合も同じように、必ず共通する部分があった。例えば、「タップリ」の場合にはそれを液体・気体について使うという回答は100%一致し、それを生物について使わないということも100%一致する。揺れを見せるのはそれを固体物について使うかどうかという点である。同様に「ヤマホド」の場合は固体物について使うという点は100%一致し、それを液体について使わないことも一致する。揺れるのは、生物について使うかどうかという点である。「バクダイ」は液体・気体について、固体物については全員が使うという結果で、生物に使うかという点だけが揺れている。

そして「タップリ」の場合、6名は液体・気体のみと回答し、残りの4名は液体・気体と固体物両方に使うと回答した。液体・気体と固体物を抽象化すると、併せて無

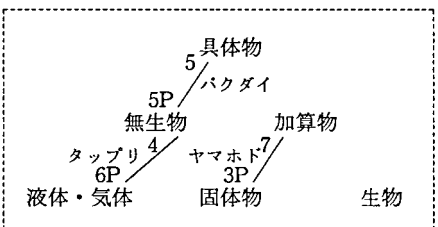
生物という抽象枠が設定できる。「タップリ」を固体物、液体・気体の両方に使うと回答した教示者は、無生物という枠で対象物に制限を持っていると考えてみる。同様に「ヤマホド」は10名のうち7名が生物についても使うと回答しており、これを抽象化すると7名は可算物について使うということになる。これを図にすると、液体・気体から固体物へという横軸の拡張が、縦軸に抽象化という軸で表現できる。「バクダイ」の場合は、すべての教示者が固体物と液体・気体について使うと回答した。したがって、無生物という抽象枠がそのまま基本レベルに設定され、そこから生物をも含むかどうかということで個人差が生じる。

これらをまとめて、1枚の図で表してみたい。

先の表で○印が2つついている枠を見ると、液体・気体と固体物という組み合わせ、固体物と生物という組み合わせは見られるものの、液体・気体と生物という組み合わせは見られなかったことである。このことを考えると、数量〈多〉のカテゴリーにおける対象物制限の「対象物」は、4で示したような構造で描くことが出来よう。この図に対象物制限のある語の教示内容を当てはめてみる。

人数は、例えば「タップリ」の場合、液体・気体のみが対象であると回答した人数を6と示している。そして、個体物と液体・気体の両方が対象物であると回答した人数4を、この2つを抽象化した「無生物」のところに4と記した。そこで、「液体・気体物」に使うということは10名全員が回答しているが、上記のような表記に基づいて10という数は記すことができなかった。ただ、揺れがない枠を示すという意味で、10名回答のあった枠をプロトタイプ（PROTOTYPE）＊8の頭文字をとってPと示した。本発表では、プロトタイプという術語を、その語を知っている教示者のすべてが所有している場合に用いることにする。

揺れのある語はすべて、10名回答の枠（Pと表示したプロトタイプの枠）から一段階上位の部分に拡張するか、しないかという個人差が出現することがわかる。最下位のレベルにある液体・気体を中心とする「タップリ」は4名が固体物にも使えると答えたことによって、この4名は「タップリ」の対象物を無生物であると考えていると抽象化でき、結果的に一段階上位のレベルにまで拡張している＊9と考える。「ヤマホド」も同様である。



＊数字は回答者数 Pはプロトタイプ枠。

ここで注目すべきことは、個人差の出現にもある程度の制限が起きているのではないかということである。社会性の高い部分が最下位のレベルにあり、個人差が真ん中のレベルにとどまらず、最上位のレベルにまで

達するということはない。社会性の高い部分から一段階抽象化できる部分までで個人差はとどまっているということがわかる。

このように見てくると、揺れはプロトタイプから一段階拡張したところまでに生じるため、最上位の対象物制限がないというところにプロトタイプがある場合には、それ以上拡張できず揺れは生じないのであろう。そして、プロトタイプ枠の隣接枠に個人差が出現することも重要である。「液体・気体物」「固体物」「生物」という順序に並べた場合このようになっているのである。

そして、対象物制限の有無というレベルで揺れを見せていた「バクダイ」は、実は一段階拡張することによって2つの枠にまたがるように見えたと解釈できるのである。

そこで、次のようにまとめることが出来る。

プロトタイプがどこにあるかが包括的体系の場合は鍵となる。プロトタイプ枠があり、その隣接枠1つについてそれを使えるかどうかという点に個人差が出現する。

この傾向は、次のように捉えることができる。例えば「ヤマホド」の場合、山のように積み上げることのできるという比況性がプロトタイプとして、すべての教示者に認識されているのではないかということ。「積み上げることのできる物（固体物）」に使用するという回答はすべての教示者に一致しているからである。同様に「タップリ」の容器性もプロトタイプとしてすべての教示者に共有されているであろうことがわかる。そしてそれらの認識が薄くなるように個人差が出現するという傾向を指摘できる。すなわち、中核語よりも具体的な場合に使われる語の場合に、中核語の方へ引き寄せられるような個人差が生じていると考えることができるのである。被修飾部制限の場合も同様のことが想定される。

5.2.2 数量〈少〉の包括的体系

数量〈多〉と同様、制限の見られた語についてそれぞれの教示者が回答した制限内容を表で示す。この表は、数量〈少〉の包括的体系のうち、1名でも対象物に制限があると答えた語を表で示したものである。ここでも、先の数量〈多〉で指摘したことが成立している。

いずれの語の場合も、個人によって差が見られるのは1つの枠だけである。

「メクソホド」の場合、

メクソホド

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	NR		○	○	○		○	○	○	7/9
固体物	○	NR	○	○	○	○	○	○	○	○	9/9
生物		NR									0/9

ショーショー

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生物	○				○	○			○	○	5/10

チックリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固 体 物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　　物	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9/10

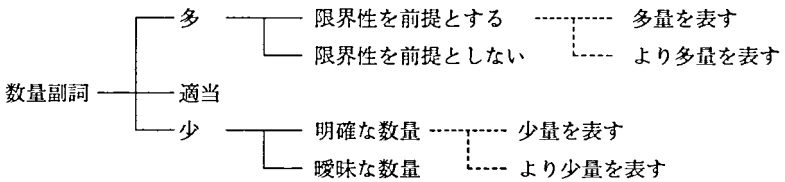
チョッピリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固 体 物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　　物	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9/10

個人差が生じるのは液体・気体物の枠であり、「ショーショー」「チックリ」「チッピリ」の場合は生物の項が揺れを見せる。この他に、揺れを見せないものの、対象物制限のある語に「ドロツキホド」「メクソシカ」があった。「メクソシカ」はすべての教示者が生物には使用できないと答え、「ドロツキホド」は蜜柑のみに使うという対象物制限がある。

以上、数量〈少〉のカテゴリー内部においても、対象物制限の内容について個人差が見られ、その出現には一定の法則がみられることを指摘した。

6　まとめ



この体系において個人差が見られたのは点線の部分である。なお、点線には2種がある。このうち、太点線は枝（分類枠）そのものの揺れはなく、そこに所属する要素（語）が揺れるもの、細点線は枝そのものを所有していない教示者のいたことを示している。

①基本的に排他的体系は個人差が出にくい。

②個人差は体系下位に出やすい。（体系下位において個人性は高くなりがちである。）

③個人性の高くなりがちな部分は、発話文によって常には捉えられないような枠である。

④個人性の高かったのは数量〈多〉の最下位で、逆に低かったのは数量〈少〉の最下位である。〈多〉の場合は枠の存在自体も個人差が生じた。

一方、包括的体系は個人差の出現しやすい体系である。

①個人差は確かに認められる。その個人差は、それが見られる人数の比をみると排他的体系に比べ確定的である。

数量〈多〉〈少〉、割合〈全〉のカテゴリーにおいて、対象物制限がある語、被修飾部制限がある語を見ると、その回答内容に個人差のある語が必ず存在する。これは排他的体系とは異なる結果である。対象物制限、被修飾部制限、共に揺れのないものはない。また、その揺れも５：５や４：６程度のものも多く、そういう意味では、微妙ではない確定的な個人差が存在するといえる。

②しかし、このように個人差が存在するものの、すべての教示者が共通の回答を行う枠（プロトタイプ枠）は必ず１つ以上存在する。そして、個人差はその隣接枠に起こる。

③そして、すべての教示者が共有する枠と、そうではなく揺れを見せる制限内容の関係をみると、具体から抽象へと一段階上の範囲に個人差が出現しているということがわかる。揺れがあるのは１つの枠だけである。どの教示者も共通して所有している制限から、その制限がなくなるように、換言すれば、より意味が抽象的になるような個人差が出現している。

主要参考文献

井上博文　1991「方言類義語の世代差についての一考察－熊本県方言に於ける〈数量の多〉を表す数量関係の副詞語彙を中心に－」『国文学攻』第130号　広島大学国語国文学会

同　　『九州肥筑方言における副詞語彙の体系性と地域性に関する研究』広島大学修士論文　未刊

岩城裕之　1998『方言語彙の個人性と社会性』広島大学修士論文　未刊

柴田　武　1988『語彙論の方法』三省堂

野林正路　1996『認識言語と意味の領野－構成意味論・語彙論の理論と方法－』名著出版

藤原与一　1988『瀬戸内海方言辞典』東京堂出版

室山敏昭　1976『方言副詞語彙の基礎的研究』たたら書房

森田良行　1977『基礎日本語　角川小辞典＝７』角川書店

同　　1980『基礎日本語　角川小辞典＝８』角川書店

広島大学内海文化研究室　1976「瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究」『内海文化研究紀要　第４号』広島大学内海文化研究室

補足資料

1　教示者の年齢は、以下の通りである。

M1:65 M2:65 M3:69 M4:72 M5:78 F1:62 F2:65 F3:66 F4:75 F5:78

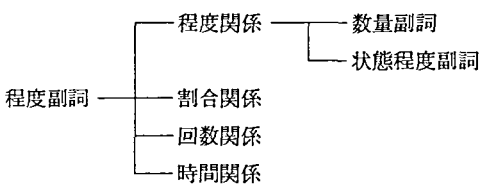
2　Ｆ５氏の数量〈多〉の分類枠の所有状況

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
バクダイ												
ナンボデモ	○											
イクラデモ	○											
ジョーサン										多		
ヨーケ										多		正
ヨケー												短
エット									上			
タクサン								共	上		新	
イッパイ								共	上	少	新	
タイソー										稀	昔	
ジョーニ												
タラフク			○									
シコタマ												
タップリ						○			上			
ヤマホド					○							

付記

本稿は1998年度広島大学国語国文学会春期大会において口頭発表したものをもとにした。
席上、あるいは学会終了後、多くの方々から貴重な意見を賜った。記して感謝する次第である。
また、本研究をなすにあたっては、調査地点の多くの方々の暖かい協力なしには成立しなかった。最後になったが、ここに、調査にご協力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げる。

＊1 数量副詞は、程度副詞の下位カテゴリーである。程度副詞を筆者は次のように描く。



＊2「内海文化研究紀要　第4号」をもとにした質問簿。語を多く得ることを目的として作成した。
＊3 分類枠にはそれぞれレベルの違いがある。3、4などの文法的なもの、8、9などの語の使用に関わるものなどである。後に体系化する際にこれらの違いを考えることにする。ただし、本論文で扱うのは数量〈少〉の場合は6までの枠についてのみである。
＊4 中核語という概念を導入した。その地区で最も頻繁に使われ、対象や場面が限定されておらず、

複合語の形態でないものという条件を満たす語を筆者は中核語と呼ぶ。この中核語は、それぞれのカテゴリー内部において中心的な語と考えられる。

＊5 排他的体系、包括的体系とも、筆者の作成した術語。英訳も同様。

＊6 ここで示した「液体・気体」「固体物」「生物」は、同レベルに並ぶ概念ではない。が、暫定的に同じレベルで示した。「液体・気体」「固体」は性質的による分類（これが加算物、非加算物という分類にもつながる）であり、両者をあわせれば「生物」に対して生物か無生物かという上位の分類となる。「生物」「固体物」を合わせると、「液体・気体」に対して加算物か非加算物かという上位の分類を想定できる。しかし、これらを同時に示すことができないため、ここでは暫定的に同レベルに3つを並べた。また、「液体」の場合は「水」など、具体的に物を提示した。微妙なものは今回は避けた。

＊7 数量〈多〉カテゴリーの場合「タップリ」「ヤマホド」のような語がこれにあたる。これを、「タップリ」は容器性があり、「ヤマホド」は山のようにという比況性があると処理することもできる。そこで「エット　アル」と「ヤマホド　アル」では後者の方が積み上げてある感じを強く持つという可能性は捨てきれない。

しかし、山のように積み上げることができないものについての「ヤマホド」を使う教示者がある以上、対象物制限という形で処理することにした。

なお、「ヤマホド」を比況性と捉えた場合も、排他的体系と包括的体系の区別は可能である。「ヤマホド」の場合は中核語「エット」の意義特徴とほとんど同じであり、これに「比況性」という特徴を付加したもので「エット」のほうが抽象性が高く上位にあると考えられるのに対し、「ナンボデモ」は「エット」に何らかの特徴を付加したものではなく、異なる特徴を有していると見ることができる。従って、体系を2種設定することの意味はあるように考える。

＊8 プロトタイプ（PROTOTYPE）認知心理、言語学の用語。カテゴリーの成員の中でもより中心的で、そのカテゴリーを代表すると思われるものをいう。カテゴリーはこのプロトタイプとの類似性に基づいて拡張していくと考えられている。

＊9 ここでの上位、下位の関係はより抽象的なものが上位にくるように描いた。また、ここでいう拡張はどちらが古く、あるいは新しいということではなく、社会性の高い部分と低い部分を、高い部分から低い部分へという流れを高低にたとえて表現したものである。

――いわき・ひろゆき、本学大学院博士課程後期在学――